

# 六郷満山寺院群詳細調査報告書



## 六郷満山寺院群詳細調査報告書

二〇一六 豊後高田市教育委員会

2016

豊後高田市教育委員会

# 六郷満山寺院群詳細調査報告書

2016

豊後高田市教育委員会



## 序 文

本報告書は、大分県の「地域の文化財魅力度アップ事業」の御助力を受けながら、「六郷満山寺院群詳細調査事業」として、豊後高田市内全域に広がる六郷満山寺院の現状を知り、今後の保護・活用に向けた方策を練るために各寺院・寺院遺構の悉皆調査をしたものであり、平成25年度から27年度にかけて、3ヶ年で進められてきたものです。

本報告書では、最盛期には65ヶ寺もあったとされる六郷満山の寺院の内、豊後高田市に所在したとされる26ヶ寺を対象に調査を行いました。経筒や土器片といった新発見の埋蔵文化財や、新たな知見が加えられた仏像・石造物などがあり、六郷満山の新たな価値・可能性を数多く発掘した有意義な調査であったと感じています。

本報告書が豊後高田市における六郷満山寺院の基本資料として、また六郷満山寺院をどのように保護・活用するかを検討する際の一助になることを願っております。

国東半島には六郷満山がある。最近、そのように言われることが多くなりました。最近では六郷満山寺院を巡る周遊コースの開拓、「峯入り」の修行を題材にした国東半島峯道ロングトレイルのコース開通など、観光面での整備が数多く行われました。平成30年には六郷満山は1300周年を迎え、関連する記念イベントも多く企画されています。

本市の文化財行政では、六郷満山を観光資源とするための施策に加えまして、石造文化財の保全、無住の寺の文化財の把握など、細やかな保護の取組みによって、これからもこの素晴らしい豊後高田市の歴史的遺産を次世代へと守り、継承していきたいと考えております。

最後に3年間にわたる調査において、六郷満山寺院群検討会委員、大分県教育委員会文化課、各寺院の住職や地元の方々など、多くの関係各位のご協力を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

平成28年3月

豊後高田市教育委員会

教育長 河野 潔

## 例 言

1. 本書は、平成25年度に実施した六郷山寺院現況調査業務及び平成26～27年度に実施した六郷満山寺院詳細調査委託業務の内容についてまとめたものである。
2. 調査は豊後高田市教育委員会（平成25年度担当岩男真吾、平成26～27年度担当松本卓也）の委託を受けて、(有)九州文化財リサーチ（業務責任者豊崎晃史）が実施した。

## 本文目次

六郷山寺院について	1	高田地区他	159
1. 六郷山寺院の成立と展開	1	16. 智恩寺	159
2. 峯入りと修正鬼会	4	17. 報恩寺	169
田染地区	7	18. 神宮寺	177
1. 富貴寺	7	19. 光明寺	181
2. 伝乗寺	21	20. 来迎寺	187
3. 胎蔵寺	31	真玉地区	191
4. 高山寺	45	21. 応曆寺	191
5. 慈恩寺	53	22. 無動寺	201
6. 岩脇寺	59	23. 本松房	215
7. 観音寺	71	24. 弥勒寺	221
8. 愛敬寺	79	香々地地区	229
9. 清滝寺	83	25. 夷岩屋	229
10. 宝壽坊	91	26. 願成寺	245
11. 間戸寺	95		
都甲地区	101		
12. 天念寺	101		
13. 長安寺	121		
14. 道脇寺	141		
15. 旧妙覚寺	147		



# 六郷山寺院について

## 1. 六郷山寺院の成立と展開

### ①仁聞開基伝説と宇佐宮・弥勒寺による寺院開発の時期（8～10世紀）

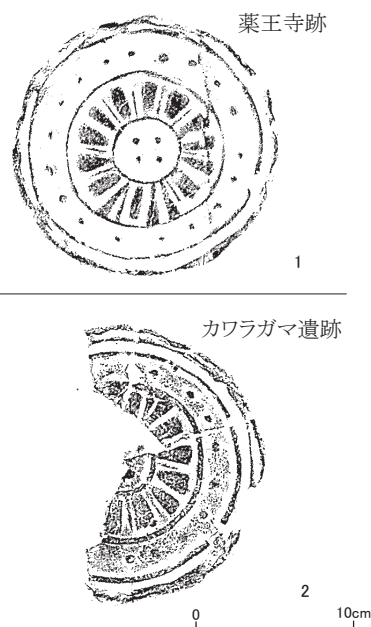
国東半島やその周辺に広く分布する天台宗寺院群を六郷山寺院と呼ぶ。その成立時期については、史料より確かめることはできず、多くは謎に包まれている。

六郷山寺院のほとんどは、養老2年（718年）の仁聞菩薩開基伝説を開山の時期としているが、寺院全体を俯瞰すると、その時代の遺物・古文書の存在は認められず、六郷山寺院の成立はもう少し時代が下った頃であると考えられる。

8世紀も後半になると、国東半島に寺院が成立していたことを示す痕跡が見え始める。『八幡宇佐宮御託宣集』（以下、『託宣集』）によると、宇佐宮神宮寺である弥勒寺の初代別当である法連は宇佐地域を中心に寺院を整備し、虚空蔵寺を創建したとされる。続いて華嚴・覚満・鉢能といった弥勒寺の僧侶達は、かねてより修行の場として成立していた御許山から、八幡神の応現ともされる仁聞菩薩と共に国東半島の峰々において修行の巡礼をしたという。斉衡2年（855年）には、能行聖人が津波戸山（山香町）の岩屋において、仁聞菩薩から国東半島巡礼の峯道を授けられ、弥勒寺僧達の修行の場として国東半島の霊場が成立してゆく。

また同時期には覚満によって、市内・来縄郷に薬王寺が開基されたとされる。薬王寺については、発掘調査から8世紀後半の活動が確認されている。また、平成7年に河内地区で発見されたカララガマ遺跡の瓦窯跡は、九州地区で類例の少ない平窯跡で、おびただしい数の焼成瓦をはじめとする8～9世紀にかけての瓦窯稼働の痕跡を示す遺構が多数見つかったばかりか、薬王寺推定地出土のものと同范と思われる古瓦が出土した。これらの事から来縄・河内地区における8世紀後半頃の古代寺院の創建と、それに関連する人々の活動があったことが明らかになった。

その他、上殿遺跡において8世紀の来縄郷の在地首長的性格を思わせる居宅跡が出土し、発掘調査により9世紀後半には智恩寺の創建が推定され、それを入口として宇佐宮・弥勒寺による本山寺院を中心とした寺院開発が進められていったと考えられている。この時期の文化財は市内には多くなく、小田原地区の内野聖観音立像（10世紀の作と推定）くらいである。



図版①薬王寺・カララガマ遺跡出土瓦の比較

### ②天台宗の流入と六郷山成立の時期（11～12世紀）

九州に本格的に天台宗が流入したのは、永保元年（1081）の弥勒寺・新宝塔院の建立であった。天台座主から法華供養法が弥勒寺僧に授けられ、堂塔供養が行われた。それからすぐに宇佐宮・弥勒寺と中央の天台宗の融合が進み、津波戸山ではその翌々年にあたる永保三年（1083）には経塚を作り、その後国東半島各所の霊場に経塚が作られていったと考えられている。

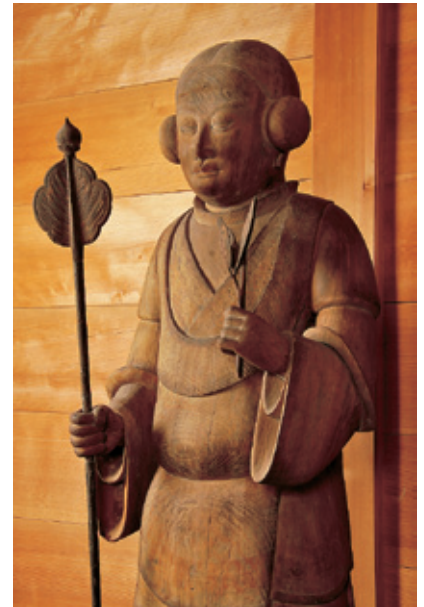
長安寺所蔵の『六郷山年代記』は慶長十二年に長安寺僧の長老格であった豪意が六郷山の歴史を記したものであるが、長年にわたる記述が豊富であり、注意して読めば六郷山の歴史を俯瞰する基礎史料として貴重である。その『六郷山年代記』によれば、永久元年（1113）に「六郷山始号天台別院無動寺」、保安元年（1120）に「六郷山延曆寺寄進六月十日也」とあり、12世紀前半に中央の天台宗寺院との結びつきを強くして、最終的には延曆寺に寄進されたことが分かる。これは弥勒寺の修行の場から、六郷山が自立した事を意味すると同時に、現在多くの寺院が残っている範囲、特に山間部への開発が急速に進んでいたことを示している。市内では高山・屋山・

応利山・長岩屋・智恩寺などの六郷山寺院が伽藍を拡張して寺院としての性格を強めていったと推定され、その活動を示す文化財が姿を見せ始める。

国の重文となっている長安寺・木造太郎天像は、多くの胎内銘を持ち、大治五年（1130）に多くの人々の結願をもって制作されたことが分かる市内最古の有銘文化財である。長安寺には他にも保延七年（1141）の銘を持つ銅板法華経（重文）を所蔵しており、同様に紀重永によって造られた銅板法華経が求菩提山（翌年）・彦山（4年後）にも存在することから、六郷山・長安寺が北部九州への天台宗の流入に関わる活動の中心であったことがわかる。この後、屋山・長安寺は中世・六郷山の惣山として大きく発展する。

その他にも、有銘の文化財には富貴寺・木造仮面（久安三年、県有形）があり、無銘のものに至っては、各谷に築かれた寺院に安置される平安仏（真木大堂・富貴寺・内野観音堂・天念寺・無動寺・応曆寺・靈仙寺など）、地方に所在する平安時代の建築として貴重である国宝・富貴寺大堂、市内最大・最古の熊野磨崖仏（重文・国史跡）など、六郷山成立期の文化財は数多く残っている。

天台宗寺院の集合体「六郷山」の組織の基礎も、この時期にはできていたと考えられている。香々地・長小野地区の庄屋の家系であった余瀬家に伝来した余瀬文書「六郷御山夷住僧行源解案」によれば、夷岩屋の僧・行源は仏事の傍ら開拓した土地の安堵について、満山大衆の署判をもって承認を求めたが、満山大衆の内訳としては、本山住僧5人の他、中山住僧については惣山屋山を始め寺院毎に数人の署判が付された。まだ中世の本山・中山・末山の三山体制や、別当・執行などの僧職も見えないが、議決組織を持つ寺院集団として六郷山が機能し始めてきていることを示している。



図版②木造太郎天立像（長安寺）

### ③屋山再興と武士の流入の時期（13～14世紀）

源平合戦の頃、緒方惟栄は平家方に与した勢力を攻撃し、寿永二年（1183）には宇佐宮と共に屋山が焼討ちに遭った。『六郷山年代記』によれば、12年間も無住の状態になったようで、六郷山全体でもかなりの打撃を受けたと考えられる。建久五年（1194）に屋山に入った応仁は、屋山の中興の祖として知られる。加礼川地区の道脇寺に伝来した道脇寺文書によれば、応仁は屋山を再興するにとどまらず、加礼川地区を中心に外坊と耕地を整備したようである。道脇寺には応仁の供養塔（江戸時代）も残されており、現地の人々の応仁に対する敬慕の念が見える。

『六郷山年代記』によれば、元久元年（1204）に「六郷惣山執行円豪」と見え、屋山再興期には六郷山の僧職に関わる制度も充実する。安貞二年（1228）の目録には、別当・権別当・執行の僧職が見えるようになり、中世・六郷山の寺院組織が確立してゆく。

更にこの時期に六郷山は関東祈祷所となった。比叡山と結びつきの強かった九条家・幕府との関係から祈祷所に指名されたと考えられており、祈祷所としての活動が見える。先述の安貞二年の目録は、関東祈祷所になった際、六郷山にあった寺院の名称・組織・勤行諸堂役祭などを書き連ねたもので、元寇の異国降伏祈祷の際にも用いられた。異国降伏祈祷の際には、六郷山各寺院が月別当番を決めて勤行を行っており、中世六郷山が1つの寺院組織となった事を象徴している。

関東祈祷所となったことにより、六郷山は武士との関係性を深めていくことになる。都甲荘を治めた都甲氏は、元々は宇佐宮神官の大神系の武士であったが、鎌倉時代中期頃から御家人としての活躍が見られるようになる。元寇においても鳥飼渦や鷹島といった激戦地で、豊後御家人の中でも目を見張る程の活躍をしている。この都甲



氏も鎌倉時代になると目立って屋山の執行などを勤めるようになる。その一方で建武の頃には多くの寺院において押領者として武士の名前が記載され、鎌倉時代までは六郷山と武士の関係は一定の距離を保っていたようであるが、少し時代が降ると武士の手が入った文化財が多く残されている。富貴寺は建武四年（1337）の注文案によれば、調幸實（筑後国上妻郡を出自とする武士）による押領を受けているとされているが、国宝の追加指定をされている富貴寺大堂の旧棟木の部分の墨書によれば文和二年（1353）の大堂修理において「調宿禰行実」が大檀那として関わっていたことが分かる。14世紀の六郷満山寺院と武家勢力の関係は、このような二面性を持ち続けているのである。

鎌倉～南北朝時代にかけて、国東半島では多くの石造文化財が生まれた。独自の様式を持つ国東塔は、市内にも3mを超える大型のものが散見され、有銘塔にも鎌倉時代のもの（塔ノ御堂）、南北朝時代のもの（熊野・大曲・福寿寺・早田）などがある。また大分県北部特有の石造文化財として石殿があり、富貴寺石殿のように細部まで精密に造形されたものが生まれた。



図版③熊野墓地国東塔



図版④富貴寺大堂旧棟木の部分

#### ④坊集落の自治と吉弘氏の保護（15～16世紀）

室町時代～戦国時代にかけての六郷山寺院の坊集落は最大の規模を誇るようになり、その中でも力を付けた坊が寺院化したり、住僧達を統制する置文を作るなどの自治を行ったりした。

長岩屋の坊集落では長岩屋住僧屋敷注文が作成された。現在伝来している文書は2つの部分に分かれており、その前半部は応永廿五年（1418）に作成され長岩屋住僧の居住・宗教施設を詳細に把握するためにつくられたもので、62箇所もの屋敷・坊が記されている。後半部は置文の性格を有しており、永享九年（1437）につくられたものである。住僧以外の居住を禁じる条文や、山公事・夏供米の徴収に関する条文などが見られる。更にそれを追認するために、同年都甲地区に入部した吉弘綱重が文言を添えている。置文部分の差出に見える権少僧都豪経は、吉弘氏系図の綱重の弟・豪慶と同一人物であると考えられており、吉弘氏の支配体制が坊集落に及ぶ際に、豪経が中心となって夏供米の再興を目指して作成されたという性格もある。

その後、吉弘氏は六郷山の組織に深く関わるようになる。綱重の子・円仲も執行となり、16世紀に入ると六郷山の高い僧職を占め、周辺寺院の再興・保護に努めたことが「六郷山年代記」に多く見える。16世紀にはいると吉弘氏直・鑑理・鎮信・高橋紹運・吉弘統幸といった人物達が、大友家中で実力を発揮する一方で、六郷山寺院と深い関係を築いていった。

戦国時代になると、吉弘氏は屋山山頂に屋山城を築き、六郷山寺院と武家勢力の融合はより一層進展する。屋山城は細長い尾根全体を使った連郭式山城で、急峻な地形を利用した天然の要害であり、吉弘氏最大の拠点として機能する。六郷山は天文年間には、大友氏からの兵力動員の文書が発給されるなど、各寺院が武力を持っていたことが知られており、市内では他に富貴寺・智恩寺などで隣接した城郭遺構が見られ



図版⑤屋山城の豎堀



る。六郷山年代記等によれば、鎮信～統幸の時代にかけて、六郷山寺院の多くが吉弘氏の保護に依存していた様子がうかがえる。

### ⑤六郷山の衰退と再興（17世紀以降）

文禄二年（1593）、大友義統は文禄の役時の敵前逃亡により流罪となり、吉弘氏も国東半島を離れた。国東半島は竹中氏（高田）、笈氏（富来）、熊谷氏（安岐）によって分割統治される。幕藩体制下では豊後国は小藩分立の状態になり、国東半島の更に複雑に分割された。17世紀後半の豊後高田市内は、およそ深溝松平氏（島原藩）、牧野氏（延岡藩、後に内藤氏）によって支配されるようになった。これによって、半島一帯に拡大した六郷山の寺院組織も解体され無力化した。

中世の六郷山寺院が直接支配していた寺領・坊は、近世には切り離され、村として再編された。宗教活動を行っていた多くの末坊は、農家へと転身を余儀なくされた。更には浄土真宗が急激に流入し、檀家を形成していく過程で、六郷山寺院は僅かな檀家しか獲得できず、数石程度の禄によって経営する小規模寺院となってしまった。

一方で石造文化財は独特な変遷を見せる。豊富な石材を利用して、地方色の強い石造仁王・庚申塔などが多く造られるようになる。墓標には五輪塔などの中世墓から、より簡単な形状をしている方形墓や角柱墓といった近世墓へと変化していった。それらの担い手は在地の石工であった。

その一方で江戸時代後期になると、夷の板井一門、大岩屋の安藤国恒、城ノ前の土谷定勝といった人物が、比叡山から法橋位を授かる仏師となると、西国東地区の石造物の質が高まってゆく。彼らは今まででは見られないような大型の石造物（夷や応暦寺の地藏菩薩立像など）を制作したり、多くの石仏を彫り上げて地域の結願の手助けをしたりした（城ノ前・寄せ四国など）。

江戸時代中期になると、両子寺が杵築藩・松平氏の保護を受けるようになり、徐々に六郷山の組織が復興されるようになる。峯入り行は集団で行う形式となって再興され、修正鬼会も西・中・東の組に分かれて、各寺院の僧侶が集まる形で執り行われるようになった。この間に退転した寺院・霊場も多くあるが、六郷山の仏事はおおよそその姿を取り戻し、現代へと引き継がれている。



図版⑥板井派仏師作の仁王像（霊仙寺）

## 2. 峯入りと修正鬼会

### ①峯入りについて

六郷山の峯入りは仁聞ゆかりの霊場を巡り歩く修行であり、9世紀にはその原型ができていたと考えられる、現存する日本最古級の峯入り行である。この峯入りが、現在のような集団峯入りとなったのは江戸時代中期以降であり、それ以前の峯入りは個人を対象とした純粋な修行であったと考えられる。応暦寺所蔵の元禄十年（1697）の「修正鬼会経文六卷」には「天正ノ比ハ住持順慶法師峯七拾五度、寛文ノ比住持澄慶法師入峯五度」とあり、多くの回数峯入りを行っていた。

18世紀になると富貴寺大堂の入峯札に、元禄十四年



図版⑦峯入り・開白護摩行（熊野磨崖仏）

(1701)・宝永三年(1706)の記録が残され、中央には「六郷満山仁聞菩薩古跡入峯行者結衆〇名敬白」、左右に参加者の名が記されている。その後は、各寺院において共通する年次の峯入りに関する墨書が見られるようになり、柱に墨書銘が見られる場合も増える。

江戸時代の峯入りに関する史料としては「豊前豊後六郷山百八十三所霊場記」「豊後国六郷山巡礼手引」などがある。これらは、六郷山の峯入り行において、各霊場の位置関係を示したもので、峯入りの際の必携書であったと推測される。距離だけではなく、「案内なくてなりがたし」など、両者の記述はかなりの部分でリンクしており、表題こそ違うが、ともに同系列の記録を写したのものであると考えられている。そのルートを見てみれば、183ヶ所の霊場の中には江戸時代には既に退転したものもあり、峯入りがいかに困難な修行であった事がうかがい知れる。

嘉永六年(1853)の峯入りを最後に集団峯入りは、一度その歴史を終えることになる。明治初期には国東半島各地で神仏分離・百姓一揆などが頻発する混乱期であり、六郷山を保護する杵築藩が消滅したことも大きく影響して、六郷山が再び勢いを失っていたと考えられる。現在行われている峯入り行は、昭和三十三年に復興したもので、概ね十年に一度のペースで開催されるようになった。

## ②修正鬼会について

現在、天念寺・岩戸寺(国東市)・成仏寺(国東市)でしか行われなくなってしまった修正鬼会は、修正会と追儺式(鬼追い)が合わさったような国東半島独自の法会である。

修正鬼会は仁聞創始の伝説もあるが、関連する文化財として最も古いのは久安三年(1147)の富貴寺・木造仮面である。内側に「御修正会」の銘があり、修正会で使用された面であることがわかる。鎌倉時代末に作成されたと考えられている余瀬文書・別当并院主分田町坪付注文によれば、夷岩屋では鬼会の檀供(餅)を供出するための水田が存在したことが分かる。その後、南北朝時代～戦国時代においても、修正会・鬼会が別の法会として幾度も登場するが、徐々に今の修正鬼会に近づいていったと考えられる。

鬼会の諸作法を記した『鬼会式』の内、文亀三年(1503)のものを写し継いだ長安寺の『初夜導師之法』は、奥書の記述こそ「修正会式」であるが、享保三年の書写以後も使われたことが分かる。また応暦寺鬼会面の銘「修正鬼会如意満足攸」にあるように、修正鬼会の記述も増え始める。江戸時代になると鬼会の道具も伝来するようになる。市内では鬼会面が30点以上残されており、各寺院で鬼会を催していた時期の様子を知れる重要な資料となっている。

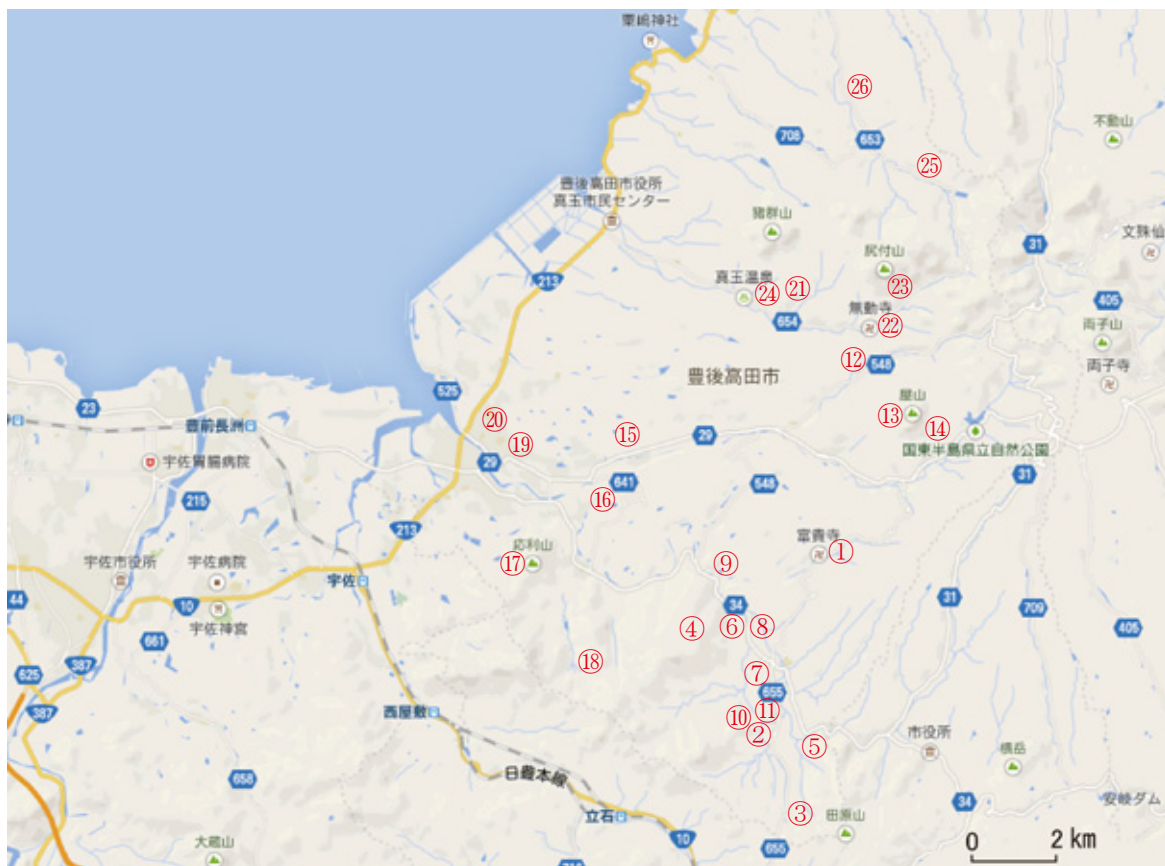
修正鬼会は江戸時代中期には、東(2組)・中・西の計4組に分かれて、僧侶達が巡るように修正鬼会が行われており、寺院の多い西組では1月12日にいたるまで連日のように修正鬼会が執り行われたようである。しかし、明治以降の混乱期に寺院が力を失う中、多くの寺院で修正鬼会が退転する結果となった。



図版⑧天念寺修正鬼会

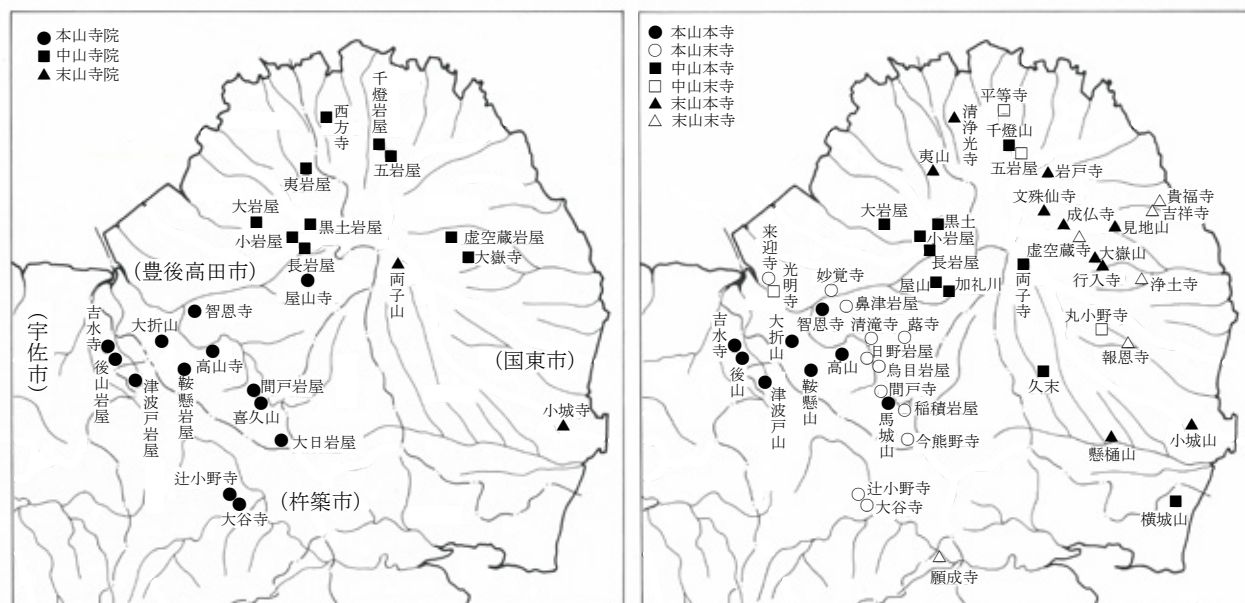


図版⑨ 豊後高田市内六郷山寺院位置図



- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ① 富貴寺 | ⑤ 慈恩寺 | ⑨ 清滝寺 | ⑬ 長安寺 | ⑰ 報恩寺 | ⑳ 応曆寺 | ㉕ 夷岩屋 |
| ② 伝乗寺 | ⑥ 岩脇寺 | ⑩ 宝壽坊 | ⑭ 道脇寺 | ⑱ 神宮寺 | ㉑ 無動寺 | ㉖ 願成寺 |
| ③ 胎蔵寺 | ⑦ 観音寺 | ⑪ 間戸寺 | ⑮ 妙覚寺 | ⑲ 光明寺 | ㉒ 本松房 |       |
| ④ 高山寺 | ⑧ 愛敬寺 | ⑫ 天念寺 | ⑯ 智恩寺 | ⑳ 来迎寺 | ㉓ 弥勒寺 |       |

図版⑩ 六郷山寺院の分布(豊後高田市史掲載図を改変)



安貞二年(1228)の目録に見える寺院

建武四年(1337)の目録に見える寺院